
サザエでGods eye 鱗 2

ナオユキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サザエでGods eye 罫 2

【Nコード】

N8244D

【作者名】

ナオユキ

【あらすじ】

タラタラタラタラッタラチャン！

失った物の大きさ

花沢さんが死んだ

そう姉さんに聞いたとき、僕は頭の中が真っ白になった。

何故？

どうして？

そんな言葉が頭の中をめぐり、自分を責める言葉に収束していった。
お前が悪い、お前が送って行きさえすれば。

カツオ

「……………」

頭を振って、思考を捨てた
今は、早川さんが隣にいる。落ち込ませるわけにはいかない。明るく、そうだ。

カツオ

「もうすぐ、夏休みだね」

作り笑いで、そういった。

そこで見上げた空は、高かった。

余計な考えが介入しない分、勉強は楽だった。
花沢さんの死を忘れさせてくれたから。

中島

「よう、磯野」

カツオ

「よう」

早川さん

「おはよ、中島君」

それは、中島も同じだったらしく、揃って同じ高校に進学することが出来た。

中島

「なあ磯野、今日俺んちに来ないか？新しくゲーム買ったんだ！」

早川さん

「中島君っ……」

カツオ

「いいんだ、早川さん」

中島

「あ…そうか…ゴメンよう磯野…ボク…」

カツオ

「……いいさ」

中島

「ごめん……」

中島は、もう花沢さんのことを忘れて前に進むことが出来ているの
だろうか。

では僕は？

僕は、

……無理、だ。

花沢さんを辱めて、そして殺して自分はのうのうと生きている。
そんなことがまかり通っていいのだろうか。

そんなことが。

犯人は捕まっていない。
僕には、それが納得できなかった。

現場に残された犯人の遺品は、凶器となったシャープペンだけだった。
それはどこにでもあるようなシャープペンで、特に手がかりになるようなものではないという。

カツオ

「今日、体育の授業でプールあるんだよな」

中島

「あれ、そうだった？」

カツオ

「おいおい。今日は水泳だよ。忘れてたのかあ？中島」

中島

「いけね、ちょっと家に帰って取ってくるよ！」

走り出す中島。その背中を、早川さんと二人で見送る。

早川さん

「行こっか」

学校の授業も、どうも身が入らない。

せつかくいい学校に入ったのにな、と苦笑してしまう。

数学1Aでついていけなくなった僕には、既に理系の道は絶たれてしまっているようだ。

カツオ（文型……頑張らないと人生ヤバいな。隣の元浪人生みたいにならないようにしないとな）

隣の浪人生、甚六さんは結局二浪して大学の神戸学院大学に入った。

すごいですね、と本人に言うと

甚六『二浪で神学は……うーん』

なんて、苦笑で返されてしまった。

人がほめているのだから、素直に受け取れば良いのに。

中島

「はぁーっ、はぁーっ。すみません、遅刻しましたあっ」

ガラリ、と扉が開いて中島が入ってきた。

パパス

「おそいぞ中島。ほら、早く席に着け」

中島

「……すいません」

カツオ

「（どうしたんだよ、随分遅かったな）」

中島

「（いやさ、なんか駅前の予備校の人に捕まって話聞かされてたんだよ）」

カツオ

「（それやあ、災難だったな）」

中島

「（まっただよ）」

パパス

「そこっ、うるさいぞっ！」

投げられたチヨークを、元野球部らしく華麗にキャッチする僕ら。

帰り道。

早川さんと中島とは駅で別れ、僕は一人普段とは違う道を選んだ。

カツオ

「……………ここにくるのも、久しぶりだな」

小学校の時は事あるごとに呼び出されて、ここの大きなソファアームに座って彼女の話聞いたものだ。

カツオ

「まさかこんなことになるなんて思わなかったからな……………」

花沢不動産

カツオ

「……………」

花沢さんの葬式以来だ。

花沢父

「お、カツオ君」

カツオ

「こんにちは。……あの」

花沢父

「判ってるよ。……さあ、どうぞ」

カツオ

「お邪魔します」

ゆつくりと、家の中に案内される。
一年ぶり、すごく懐かしい

かつては和気藹々としていた空気も、
今ではひんやりとした空気になっ
てしまっている。

花沢父

「ここだよ」

カツオ

「はい」

本来いるべき人がいないから、
こんな空気になるんだろうな。

カツオ

「…………ふう」

目の前に、その『本来いるべき人』の写真が飾ってある。

カツオ

「一年ぶりだね……花沢さん」

中学三年生の時の花沢さん

小学生の時よりずっと綺麗な花沢さん

カツオ

「綺麗になったでしょ！？って、いつつも聞いてきてたな……」

線香をあげながら、僕は独り言をもらす。

カツオ

「実際、綺麗になってるから困る。……困る？いや、困らないか」

困らないはずが、なかった。

カツオ

「花沢さん、僕は、うん。大丈夫。いつもどおりさ。花沢さんがいなくても、元気にやってるよ。…本当さ」

遺影は答えない。

当然さ。

潜む者！！

花沢父

「お。もういいのかい？」

カツオ

「ええ、挨拶は、すみました」

花沢父

「そうかい。よかった。あの子も喜んでるよ」

カツオ

「そうだと、いいですね」

部屋の外で待っていた花沢さんのお父さん。
顔には出していないが、やはり辛いのだろう。
去年よりもいくぶん痩せて見える。

カツオ

「……では、僕はこれで」

花沢父

「あ、カツオ君。待ってくれ」

カツオ

「？」

花沢父

「…………ありがとう、な」

僕に向かって、頭を下げるお父さん。

カツオ

「…………はい」

そう、答えることしか出来ない僕。

夕暮れの道を帰りながら、犯人を捜すクセがついたのはいつごろだったか。

犯人の具体像がわからないのに、見つかるはずがない。
でも、さがさないわけにはいかなかった。

それが、何も出来ない僕の。僕に向かっての免罪符だった。

カツオ

「…………おや、タラちゃん」

タラヲ

「あ、カツオ兄ちゃん」

一人で、遊具で遊んでいるタラちゃん。友達は、帰ってしまったの

だろうか。

カツオ

「一人かい？タラちゃん。いつも一人は危ないよって、言ってるよね」

タラヲ

「それはカツオ兄ちゃんもおんなじですー」

カツオ

「……迎えにきてくれていたのかい？」

タラヲ

「そうです。えへんですー」

カツオ

「そっか……。じゃあ、一緒に帰ろうか」

晩御飯の匂い。

家に帰ってきたことを、感じさせてくれるにおい。

カツオ

「ただいま」

タラヲ

「ただいまですう」

サザエ

「タラちゃん！どこ行ってたの？！」

タラヲ

「カツオ兄ちゃんを迎えにいつていたですう」

サザエ

「駄目じゃない！こんな時間に外に出たら！」

タラヲ

「で、でも……」

カツオ

「姉さん」

サザエ

「何よ」

カツオ

「タラちゃんの気持ちも、汲んであげようよ」

サザエ

「……」

無事に帰れた。それでいいじゃないか。

寝る前に、ワカメの勉強を見てやる。

なるほど、こいつはなかなか出来る。努力すれば、僕より上の高校も可能性が見えてくるだろう。

ワカメ

「お兄ちゃんには負けられないもの」

カツオ

「それなら、僕も頑張らないとな」

ワカメ

「頑張ったって無駄よ！あたしはもつと頑張るもん！」

カツオ

「その意気が大事だよ」

結局、子供部屋の電気が消えたのは12時だった。

僕とワカメが布団にはいつて一時間後。

カツオ（……なんだ！？）

襖をはさんだ廊下。そこに、誰がいる。

誰だかは判らないが、確実に、そこに誰かがいる。

カツオ（ワカメっ）

襖を凝視しながら、片手でワカメをゆすって起こす。
なあにい、と、目を擦りながらワカメが目を覚ます。

ワカメ

「どうしたのよお……」

カツオ（時刻は……一時……か）

口でしっ、と、声を出さないように制する。
そして、僕より前に出ないように、と目で合図する。

ワカメ

「う、うん……」

困惑した様子で、ワカメは頷いた。

僕は、中三以来触っていなかったバットに手を伸ばした。

ドクンドクン、と心臓が高鳴る。

カツオ（……っ）

一歩一歩、襖へと足を進めていく。

カツオ

「……だ」

襖に、手をかけた。

カツオ

「誰だっ!？」

黒い何かが、目に飛び込んできた。

カツオ

「っ!！」

何かいる!と思ってバットを振りかざした。

その時、僕の後ろで大声がした。

ワカメ

「タラちゃん!!」

カツオ

「え……?」

そこにいたのは。

タラヲ

「カツオ兄ちゃん。僕、一人じゃトイレに行けないんですう……」

タラちゃんだった。

カツオ

「……な、な、なんだ……」

タラヲ

「ど、どうしたんですかあ?」

カツオ

「いや、なんでもない。なんでもないよ」

僕は笑って、手に持ったバットを床に置いた。

なんだ、杞憂か。杞憂。

要らない心配だ。はあ。

翌朝。

フネ

「昨日はゴメンね。タラちゃんのトイレに付き合ってくれてたみたいね」

カツオ

「いいよ。姉さんもマスオさんも朝早いし。起きれないのも、無理ないよ」

フネ

「そう……」

いつもどおり、出来上がった弁当を鞆に押し込み、朝食を食べる。

つけっぱなしのテレビは、朝のニュース。

「イージス艦と漁船が……」

カツオ

「……ギョーザのニュースはどうした。花沢さんの事件はどうした」

花沢さんの事件に進展はなかったかどうか。

それを、チェックするのも毎日の日課。

サブちゃん「ちわー三河屋でーす」

学校。

中島

「磯野っ」

カツオ

「おう。中島」

中島

「……………昨日は」

カツオ

「ああ、ちゃんと行ったよ」

中島

「なあ磯野、あのさ」

カツオ

「……………なんだ？」

中島

「こんなこと言うのもあれだけど……………僕らもう、花沢さんの事件は忘れるべきじゃないのかな……………」

カツオ

「何をっ……」

中島

「だってさ!」

中島が、言葉を強くする。

中島

「僕らには、どうしようもないんだ!僕らイチ学生には、なんにも出来やしないんだよ!

警察だって手をこまねいているのに……」

カツオ

「……てめえ」

右手に力が入り、気づいたときには。

中島

「ぐっ……」

中島を、殴っていた。

カツオ

「……あ」

早川さん

「磯野君!何してるの!」

カツオ

「……あ、ご、ごめん！中島！」

慌てて、地に頭をつけて謝る僕。

どうしてだ。殴る相手は、中島じゃないはずなのに。

中島

「……いや、いいさ。僕が悪かった。でもさ、磯野。いつまでもこうやって、うじうじ花沢さんのことを引きずのを、

花沢さんは望んでいると思うか？」

カツオ

「それは……」

中島

「前に進んで欲しい、と思ってるとは思わないか……？」

カツオ

「……ぐ」

そんなこと。

そんなこと。僕だってわかってるんだ。

僕はそのまま駆け出してしまった。

早川さん

「磯野君！」

早川さんが僕を呼ぶ。

僕は、止まらなかった。

——駅前——

気づいたら、駅前にいた。

カツオ

「……」

この街で、一番繁華なこの地域。

その騒音が、今の僕にはこのうえなく不快だった。

予備校職員

「あ、キミ！あの学校の生徒だね！どう？キミもいい大学を目指してみない？」

空気を読んで欲しい。

そうは思っていないでも、半ば強引にパンフレットを渡された。シャー

プペンつきの、分厚い冊子。

カツオ

「……ん？」

このシャープペンに、見覚えがあった。

カツオ

「。。。予備校……」

どこかで見たことがある。

思い出せ。そうだ。決して忘れてはいけないものだったはずだ。

思い出す。

そうだ。

これは。

カツオ

「花沢さんが殺されたときの……」

あのときのシャープペンと、同じものだ。

カツオ

「……あ」

予備校。

僕が中学三年生の時。近所で、予備校に通っていたのは誰だ？

浪人生なんて、そんな。

そうたくさんいるものじゃない。あんな免罪符を持ったニートなど、
そうたくさんいては国が滅ぶ。

カツオ

「……まさか」

そんな人、僕の知り合いの中には一人しかいない。

カツオ

「……!」

気がついたら、走り出していた。

カツオ

「母さん！」

フネ

「カツオ?! どうしたの?!」

カツオ

「神戸学院大学って、どこだ?!」

フネ

「神戸学院……? どうして、あなた学校は?」

カツオ

「良いから! 教えてよ!」

母さんはたじろいで、目をしばしばさせながら考える。

えっと、あ、そうだ。

フネ

「神戸学院って、甚六さんが行つてるところじゃない?

そうそう、確かあそこは明石の……」

カツオ

「判った！」

証拠は、このペンだけ。

あつてるかどうかなんて、そんな。
今、気にすべきことじゃない。

電車を乗り継いで。

知らない街まで。

手にはペン。こいつが、多分全てを語ってくれる。

カツオ

「甚六さん！」

甚六

「……カツオ君？」

日差しが強い、空の下。

目の前には甚六さん。

僕の息は切れ切れ。

甚六

「どうしたんだい？」

カツオ

「はあっ……はあっ……これを」

甚六

「……なんだい？これは。……あ」

僕が渡したシャープペンを、握る甚六さん。

カツオ

「それに、見覚えは？」

甚六

「……んん」

カツオ

「どうですか？」

甚六

「ないね」

カツオ

「……本当に？」

甚六

「本当さ」

さあ、賭けだ。

カツオ

「甚六さんに、聞きたいことがあるんだ」

甚六

「何かな？僕、こう見えても忙しいんだ」

カツオ

「忙しい？んん。そうだろうね。これから逃げる準備だ」

甚六

「何を……！！」

判りやすい。

これだけで証拠になりそうじゃないか。

カツオ

「僕、甚六さんが花沢さんを殺したんじゃないかって、思ってるんだ」

僕は言い放った。

僕らの間に、一吹き風。

青い葉っぱが宙を舞って、僕らの間に落ちる。

この、距離。

僕の、捜し求めていた人物との距離。

甚六

「……僕が、花沢さん……を？」

カツオ

「そうだ。甚六さんが、花沢さんを、殺した」

甚六

「なんで、何を証拠に。これかい？このペンが証拠、とでも言うのかい？」

カツオ

「前に、姉さんが言ってたんだ」

甚六

「何を？」

カツオ

「姉さんは、いつもあの道を通ってたんだ。そう、花沢さんが、殺されたあの公園のあるあの道」

甚六

「キミの姉さんが仕事？そんなの初めて聞いたよ」

カツオ

「朝早いからね。昔と違って、日中家にいるわけではない甚六さん

が知ってなくても不思議じゃない」

甚六

「……」

カツオ

「姉さんは言ってた。甚六さんを見たって」

甚六

「……っ」

カツオ

「あの道で、甚六さんを見たって。あの日だけ。なんでだろうねって、言ってたんだ」

甚六

「たまたま、ということがある。そうだ、ちょっとコンビニに行ってたんだよ、あの日は」

カツオ

「……本当に？」

甚六

「そうさ！週刊誌を買いにいったんだ！」

カツオ

「もう夜遅かったよね？」

甚六

「買い忘れくらい、するだろ？」

カツオ

「そう。……甚六さんはコンビニに行った。そして、あの道を通った。そうなんだね？」

甚六

「そうだよ。なんなら、家に帰って雑誌を見せようか？残ってるかどうか判らないけど」

カツオ

「いや、これだけで十分だよ」

甚六

「……？」

カツオ

「だって、姉さんが甚六さんを見たっていうのは、嘘っぱちなんだから」

六

「……！」

カツオ

「甚六さんは、間違いなく、あの道を通っていたんだ」

甚六

「……」

カツオ

「こんな軽いひっかけに見事に引っかかるとはね……」

甚六

「……」

カツオ

「で、どうなのさ。 甚六さん」

甚六

「……」

カツオ

「…… 甚六さん、 法学部だったよね」

甚六

「……」

カツオ

「……二年かけてやっと学ぶことが出来たことを、裏切ってるかもしれないんだよね」

甚六

「……で」

カツオ

「…… 甚六さん。 お願いします。 本当のことを、 言ってください」

視線が交錯する。

僕の目と、甚六さんの目と。

その視線が交じり合う、その数秒。

どれだけ長い時間に思えただろう。

僕の一年越しの答えが、そこにあるかもしれない。

僕は、胸の高鳴りが抑え切れなくて。

そして、そのながいながい時間の終わりに、ゆっくりと、甚六さんが口を開いた。

甚六

「本当のことを話そう」

カツオ

「……！」

賭けに、勝つ……た？

イササカ先生「…と、言う話はどうでしょう。」

甚六

「僕は、そうだ。共犯、と言っていい」

カツオ

「共犯？」

甚六

「共犯。凶器は確かに、僕のシャープペンだ」

カツオ

「そして犯人はあなただ」

甚六

「だから、共犯だって言っただろ？犯人は、もう一人いるんだ」

カツオ

「……なに？」

甚六

「キミの、よく知っている人さ」

カツオ

「何……だと……」

甚六

「あの公園で、いつも遊んでいたのは、誰だい？」

「

カツオ

「まさか！」

昨日の出来事とが脳裏によぎる。

甚六

「キミが、弟のように可愛がっている」

頭が、爆発しそうになる。

甚六

「タラちゃんさ」

カツオ

「……そんなの信じれるか！」

その時、僕の後ろに、誰かが立っている気配がした。

タラヲ

「やっぱり、昨日、殺しておくべきだったですねえ」

カツオ

「タラちゃん！」

そこにいたのは、あのタラちゃんだった。

包帯の巻かれた包丁をすつと、とりだして、はらはらと包帯を解いた。

太陽の光が、その刀身を輝かせている。

タラヲ

「……そうです。花沢さんを殺したのは、僕です」

カツオ

「そんな……」

タラヲ

「一年。一年待ちました。そして、カツオ兄ちゃんが花沢さんを忘れてくれるようなら、生かしてあげようと思ってました」

カツオ

「……」

言葉も出ない。

タラヲ

「でも、カツオ兄ちゃんは花沢さんを忘れませんでしたねえ。だから昨日は殺そうと思ったんです」

カツオ

「でも、でも、なんで！なんで花沢さんを！」

タラヲ

「女の人の体がどうなってるのか、知りたかっただけです」

いつもどおりの顔で、タラちゃんは言う。

タラヲ

「最初はママに聞きました。でも、まだ早いつて教えてくれなかったんです。その後は、ワカメ姉ちゃんに聞きました。

教えてくれませんでした」

カツオ

「……」

タラヲ

「ふてくされて公園に行きました。そしたら、花沢さんがいたんです。」

カツオ

「それで、花沢さんは……」

タラヲ

「でもよくわからなかったし騒がれちゃったから、甚六さんにもらったシャープペンで刺したんです。」

カツオ

「！」

甚六

「僕も……僕が何気なくあげたシャープペンが、あんなことに使われているなんて思いもしなかったんだ……」

頭を抱えて、座り込む甚六さん。

タラヲ

「抜けなくなっただって、甚六さんに伝えにいったんです。そして、すぐに逃げちゃいましたねえ。」

カツオ

「……っ」

震えたまま、立ち上がらない甚六さん。

つまり、そういうことなんだ。

甚六さんは、直接的な犯人ではない。

直接手を下して、直接花沢さんをあんな姿にしたのは。

カツオ

「タラちゃん……」

タラヲ

「僕だっていつまでも子供じゃないんですう。女の人に、興味だつてありますう」

カツオ

「そんな……常気を逸している…っ!!」

握り締めた手から力が抜け。

ひざの力も抜ける。

タラヲ

「カツオ兄ちゃんが死ねば、ほんのことを知ってるひとはいないですう」

ぎらり、と、刃が光る。

足に力は、入らない。

タラヲ

「しねっ！」

僕の首が飛んで、花沢さんと同じところにいくのもあと数秒。

そうか。タラちゃんだったのか。

犯人がわかった安堵以上の、その相手に対する驚きと、恐怖。

こんなやつと、同じ屋根の下ですごしていたのか。

…死ねない

ワカメ、姉さん、母さん。そしてついでにマスオさんの顔が浮かんだ。

このままではいけない。

でも、足に力が入らない。

だめだ。

カツオ

「っ！」

刃が、すぐそこまで迫ったその時。

中島

「磯野！！」

聞きなれた声。

そして飛びちる鮮血と、倒れる中島

タラヲ

「ちっ！」

カツオ

「な…中島ア…！」

慌てて体を起こす。傷は、深い。血が、止まらない。

中島

「う……」

早川さん

「磯野君！」

駆けってくる早川さん。その後ろには、母さんだ。

タラヲ

「しまった……！」

タラヲ

「くそ！ですう！」

カツオ

「逃がすかよ！」

投げられる白球。50メートルほどの距離を、白球は一直線に走り、タラちゃんの包丁を弾いた。

タラヲ

「ですう!?!」

早川さん

「逃がさないわよ!」

そして、その後ろからタラちゃんを抑える早川さん。

タラヲ

「く……う……」

観念したらしく、ひざをつく。

カツオ

「中島……っ!」

僕は中島に目を落とす。

カツオ

「母さん、救急車だ!」

中島

「……ああ、磯野。ごめんよ、僕、磯野に……」

カツオ

「いいんだ。僕のほうこそ……」

中島は、肩で息をしながらなんとか僕の方を見ている。

目は、死んでない。目は、そうだ。

カツオ

「もうすぐ、救急車がくる。頑張って！」

中島

「……ああ、頑張るよ。でも、どうだい？」

僕のたった一人の……大切な親友。その親友を守って死ぬ……
今までの、そう……まるで滑稽なピエロだった、僕の死に方としては、
上出来じゃないか」

カツオ

「何を……」

中島

「……磯野……ごめん」

カツオ

「中島っ！」

ぐったりとする中島

到着する救急車。

タンカの上の中島。

遅すぎた救急車。

タンカの上の……

僕が覚えているのはそこまでだ。

気がつけば病院の、手術室の前に座っていた。

治療中のランプ。

隣で祈る母さん。 早川さん。

カツオ

「……甚六さんは？」

早川さん

「タラちゃんといっしょに、警察に……」

カツオ

「そっか……」

僕は手術室を見やった。

まだ、出てくる様子はない。

カツオ

「少し、一人にさせて欲しい」

僕は席を立って、屋上に向かった。

既に夜だった。

夏でも、少しひんやりとした風が、僕の顔をなでた。

カツオ

「犯人、やっと見つけたってのにな……」

達成感というより、脱力感

脱力感というより、無力感

カツオ

「まさかタラちゃんだったとはなあ……」

あの体で、よくも。あの花沢さんを。

カツオ

「男の欲の力は恐ろしい……僕ももしかしたらああなってしまうのかな」

でもとりあえず、終わったんだ。

この事件がどういう結果で終わるかはわからない。だけど、これで一区切りだ

カツオ

「……一年。長かったなあ……」

床に寝転んで、空を見た。高い空。

カツオ

「……もう、前に進まないとなあ……」

どうなんだろう。

僕は本当に前に進めるのだろうか。

でも、頑張らなきゃな。

花沢さんのためにも、頑張らないとだな。

カツオ

「頑張ろう」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8244d/>

サザエでGods eye 鱒 2

2010年10月11日02時32分発行